
Cross × world ~ 交錯する世界 ~

元号四年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Crossworld ～交錯する世界～

【Nコード】

N2266U

【作者名】

元号四年

【あらすじ】

国立葉盟学院に編入することになった高校生、星野龍馬。法術と魔法と異世界とかモンスターとかいろいろなものが入り混じった世界でやっていく学園ファンタジー！（多分）名無き世界と未知の世界（仮）の名前が決まったんで改訂版と共に乗っけていきます。

1-1 この学校でかすぎないか……？（前書き）

タイトルがどこかで聞いたことあるような名前かもしれませんが、完全なオリジナルですので。

それと、にじファンのほうでときメモのとかやっていますので、興味があればそちらもどうぞ。

改訂版としてちよくちよく更新していくので、見てもらえると嬉しいです。

1 - 1 この学校でかすぎないか……？

「……なんだこの馬鹿でかい建物は」

荘厳な作りの校門をくぐって一番最初に目に入ったのは、イギリスのウエストミンスター宮殿の設計者もビックリするサイズの建物だった。事前に貰った校内のパンフレットには第一校舎と書かれているが、とてもそうは思えない。むしろ……駄目だ。比較できるものが無い。

「星野くん」

校舎のでかさに呆気に取られていると、右の方から俺の名前を呼ぶ声が聞こえた。そっちを振り向くと作業服を着た綺麗な女の人立っていて、学園の雰囲気と作業服の生み出す違和感に軽く眩暈がした。

だが、この程度で驚いてたらこれから先体が持たないだろう。とりあえずきちんと挨拶はしなければ。

「こんにちは。月詠先生……でしたよね？」

「はい。月詠曆つきよみです。これからは生徒と教師の関係なので、よろしくお願いしますね」

そう言って月詠先生は深々と頭を下げた。

俺の名前は星野龍馬ほしのりょうま。今日から「こゝ」、葉盟学院えいめいがくいんに通うことになった高校二年生だ。

葉盟学院は幼少部から大学院まである、中等部以上は全寮制の学校で、総生徒数はなんと十万人を越えるマンモス校だ。当然その分土地も広く、日本のほぼ中心に位置する静岡県のあまり開発の進んでいない部分を国が買い取り、完全な育成機関を作ったという事らしい。作つた理由の一つとして囁かれているのは、少子化を止める為に出会いの場を若いうちから多く作つてやろうというのも有力な説らしいが、国はそっちは否定している。

この学院は創設からまだ十年しか経っていないと聞いたが、そう考えると人数も規模も大きすぎると思うだろうが、実際はそうでもない。この学院は世界中で試験的に作られた学校と提携していて、世界中からいろんな人が集まってくる。実際、この学院にいる生徒の三分の一は外人だし、全寮制だから日本中から入校希望者が集まってくる。俺が知ってる県内の私立校でも、六百人は簡単に集まるんだからこの人数は大したことないのかもしれない。

この学院が建てられる前に建っていた学校や色々なものは、学校のほうは過疎化で廃校。その他も、国から出された多額の援助金のおかげで特に揉めることなく立ち退きは進み、学院を建てるのに必要な土地はほんの一ヶ月で用意できたらしい。この辺りは、この国の汚い部分が出た結果だと思うが、まあ、気にしないでおう。

「それじゃあ早速クラスのほうに行きましょうね。今は丁度ホームルームの時間なので、いい頃合いだと思います」

「あれ、月詠先生って担任なんですよね？　今クラスってどうなってるんですか？」

「ノープロブレムです。全部副担任の松岡先生に任せてありますから」

普通副担任がこっちに来るんじゃないのか？　まあ、聞くのは野

暮だから別にいいけど。

「じゃあさっさと行きましようね。二年生の教室は七階から九階なんですけど、星野君のクラスは二十四組なので八階になります」

ほうほう。校舎が縦にも横にもでかいのはそういうことか。

「ところで、八階まではどうやって行くんですか？」

まさか階段を上がるわけではあるまい。

「普段はいろいろな方法があるんですけど、今日はエレベーターで行きましょう」

流石は国立。校舎内にエレベーターがある学校なんてここぐらいのものだろう。

ただ、一つ気になる。

(いろいろな方法ってなんなんだ……?)

俺には階段を上がるぐらいしか思いつかないんだが……。

エレベーターはかなりの大きさだった。普通のエレベーターは定員十二名、積載量は七五〇キロが相場だが、このエレベーターは定員一五〇名、積載量はなんと十トンというこちらもモンスターマシンだった。現代の工業はここまで進んでいたのか。

それはともかく、エレベーターを降りて一番最初に思ったのは、廊下がとてつもなく長い。聞いた話だと横に教室が十六×二（教室が二列に並んでいて、東側の教室と西側の教室の間に廊下がある）、トイレが両端と真ん中に計六つ、エレベーターが校舎の真ん中を突っ切る形で縦に十六階まである。耐震は万全なんだろうか。

「星野くん、こっちです」

声のした方を見ると、月詠先生が大きく手を振っていた。目の前の教室の中にいる生徒は月詠先生が大声を出しているにもかかわらず、何事も無いように授業を続けている。どうやら防音が完璧らしい。

「ここが二十四組です。西側の教室なので間違えないようにしてくださいね」

月詠先生が丁寧に教えてくれるが、俺の頭は全然違う方向に向いていた。

「じゃあ少し待っててくださいね」

そう言って月詠先生は教室の中に入っていった。

「はいみなさん、ちゅうもーく」

それまで机の上のプリントに夢中になっていた生徒全員が顔を上げる。

「今日は、前から話していたように転校生が来ます！」

それまで静かだった教室が一気に騒がしく（完全防音なので声は聞こえないが）なる。まあ、転校生（高校は編入生か？）が来たら普通そういう反応になるだろう。

「じゃあ早速呼んじやいましょう。星野くん、入ってきてください」

そう言って（聞こえないけど多分そんな感じのこと言ってるんだろう）俺にこっち来いとジェスチャーを送ってきた。

一つ深呼吸してドアに手をかける。だが、意外と緊張はしてなかった。

一気にドアを開けると、先程とは一転静かになった空気が俺を出迎えた。そんな空気は一切気にせず、教室の前方にある超巨大プラズマディスプレイの前まで歩いていく。

だが、毅然な態度で自己紹介をするというプランは簡単に崩れた。

理由その一、視線が痛い。

この学校は一クラスが百人もいる。当然今の俺はその百人の視線を受けているわけで、こんな状況で毅然とした態度なんてとれるはずがない。やっぱりというか、なんというか。

「星野君、自己紹介してくれますか？」

「あ、はい」

そつだ、まずは自己紹介から入らなければ。俺はもう一度深呼吸をして前方を見据えた。

「星野龍馬です。よろしくお願いします」

頭を下げてから上げる。 ちよつと待った。なんだこの空気。まるで『もつと言つことあるだろ』みたいな感じじゃないか。

申し訳ないが言うことなんてない。というか、言えることが無い。趣味や特技なんてここで言ってもあまり意味はないだろうし。どうせ、俺は日曜大工が趣味です！ とか言っても、へえそうなんだという答えしか返ってこないだろう。ちなみに俺の趣味は日曜大工ではない。工作は得意だが、そこまで好きでもないし。

しかし、このままではマズイ。このままでは暗い奴、もしくはつまらない奴のレッテルを貼られてしまう。

「じゃあ星野君の席は 」

どうやら時間切れのようだ。月詠先生が自己紹介はもう終わったと思つて俺が座る席を探し始めてしまった。

今になつて思い返してみれば、「この学校に来る前はこんなことしてました！」とか、「好物はママの作ったミートパイです（嘘）」とか、「実は俺、組織から特命を受けた超能力探偵なんだ……」とか色々言えたと思う。いや、最後のは厨二病っぽかったから言わないう方が良かったか（厨二病というものをいまいち理解して無いんだけど）。

「 君、星野君！」

「は、はいっ？」

全力でバカな妄想をしていると、何度呼びかけても返事の無い俺を不審に思ったのか先生が覗き込むように（あるいは下から抉るように）俺の前に立っていた。やっべ、声裏返っちゃったよ。なんか笑われてるし。

「あそこの席に座ってください。隣にこのクラスの委員長が座っているんで、分からないことがあったら彼女に聞いてくださいね」

月詠先生が指差したのは教室の中ほどにある席で、その席の隣にはきりつとした目つきの少女が座っていた。俺はその席まで歩いていって、指定された席に座る。途中両脇の生徒（その他多数）の視線を浴びせられたが、それもある意味気にはならなかった。

なぜなら、俺の隣の少女があまりにも可憐な美少女だったから。

いや、「可憐」という表現には語弊があるだろう。確かに美少女には違いないが、可愛すぎて近寄りがたいタイプの美少女と言うより、そこら辺に普通にいそうな真つ当な可愛さを持っている。俺がここに来る前にいた神流学園ではそれこそ「絶世の美少女」と呼んでも過言じゃないような女子がいたが、あれはその容姿ゆえに学園内で孤立し、彼女自体もそこまで他人と関わるのも得意じゃなかったから今目の前にいるこの子とは似ても似つかないタイプだ。

一般的な男子高校生だったら隣の席に滅茶苦茶可愛い子がいたら「俺の隣の席の子超可愛いぜヒャッホイ！」とか、ありえないぐらいのテンションになるものだろうが、数ヶ月前に起きたアレのせいで俺は女子に対する認識を改めている。だからどうってわけじゃないんだけど。

しかし、果たしてこれは現実なんだろうか。恐らく今の俺は相

当間拔けな顔をしているか、有り得ないぐらい真剣な目つきをしているかのどっちかだろうが、どっちにしても目の前の美少女が現実世界に居ていいような存在ではないことは分かる。二次元から出てきましたって言う方がまだ信憑性はあるだろう。いや、世の中には小学生にしか見えない教師がいるらしいし、二次元から出てきたような女の子がいても不思議じゃないのか？

「あの……」

「は、はいっ？」

うおあまた声裏返つちまった。周囲の生徒の視線が痛いぜ。

「席、座つたらどう？」

「あ、ああそうだね！ このままじゃいつまでもホームルームが再開できないだろうし」

言いながら席に素早く着席する。周囲の生徒からやっぱり奇異の目を向けられたがそれについては気にしない。これだけ生徒がいれば変わった奴の一人や二人いるだろうし。

もう一度視線を委員長のほうに向けると、委員長はにっこりと微笑んで、

「分からないことがあつたら何でも聞いてね。なんて言っても、私はこのクラスの委員長なんだから」

「ああ。そんじゃ、これからよろしく。えっと……」

「私の名前は、鬼灯灯。鬼灯つて知ってる？」

「ああ。夏に黄白色の花が開いて、初秋に袋状の萼に包まれた球形の果実を結ぶナス科の多年草だろ？」

俺がそう言うと、鬼灯と名乗った女子は一瞬ポカンとした顔になったが、すぐにいい笑顔へと表情を戻した。まあ、高校生に「鬼灯って知ってる？」って聞いたらまず間違いなく「中に蛭入れると綺麗に光るアレだろ？」と答えるだろう。いや、今の高校生はそもそも鬼灯を知らないか。

「へー、物知りなんだね。その鬼灯に、街灯の灯で灯って書くんだ」「同じ漢字が二つ続くのか。珍しい名前だな」

「うん。よく言われる」

「そんじゃよろしくな、委員長」

「うん！」

「はい、それじゃあ話を進めますよ」

そう言いながら月詠先生が手を叩きながら近寄ってくる。

「それじゃあ星野君、これが一週間の予定表になります」

そう言って月詠先生が一枚のプリントを取り出して俺の目の前に差し出す。えっと、今は四時間目のはずだから、四時間目はホームルーム、五時間目は数学、六時間目は魔法……魔法？

「月詠先生、ちょっといいですか？」

「はい。なんですか？」

「俺の目がおかしくなったんじゃないかなければ、六時間目に魔法の授業があるように見えるんですが」

そう、これは絶対印刷ミスだ。この二十一世紀の世の中で魔法なんてものがあるはずが無い。あつてたまるか。きつと立法とかその辺りが間違つて印刷されたんだろう。そんなものが普通にある学校もどつかと思うが、神流学園には「帝王学」やら「量子物理学」や

ら「海洋生物学」といったおかしな授業までラインナップされてたからそこまで驚く必要も無いのかもしれない。

「はい。この学院では必修科目として一週間に十回魔法の授業があります」

うん。これは俺の耳がおかしくなったんだ。この二十一世紀の下略。この予定表に書かれている月曜から木曜までの六時間目が魔法って書かれているのも、金曜日が魔法の演習って書かれているのも全部印刷ミスなんだ。って多すぎだろ。

「先生、この学校つてもしかして……」

「はい。星野君のお察しの通り、この学院は魔法使いを養成するための学校なのです」

パンフレットに書かれているはずなんですけど　という月詠先生の声は全く頭の中に入ってこなかった。

魔法……この二十一世紀に魔法……。はは。なるほどね。

「ドッキリか……!!」

なるほど。この学院の生徒はなかなかユーモアのセンスがあるようだ。教師までグルになってやるとは随分と手の込んだことをしてくれる。しかも見た感じじゃこのクラスの全員がドッキリに加担しているに見える。ならば俺は完璧なまでの道化を演じてやろう！

幸い今の俺の眩きは聞こえなかったようで、月詠先生はキョトンとした目をしている。

「そう言えばそうでしたね。ちょっと流し読みしただけだったんで一番大切なところを度忘れしてましたよ」

「そうでしたか。魔法の授業は場合によっては怪我人や死者を出すこともあるので、あまり事故を起こさないように気をつけてくださいね」

ほう、なかなか徹底しているな。先生の嘘まで堂に入ったものだ。

「それじゃあ進路調査票を回収しますので、一番後ろの席の生徒は列の全員分を回収してきてください。星野君には後でプリントを渡しますので、明日までに書いてきてくださいね」

そのままチャイムが鳴って四時間目が終わった。

1-1 この学校でかすぎないか……？（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

1・2 ツンデレってなかなか面倒くさい(前書き)

エルザはここだと嫌味なキャラですが、本来は純情でとても可愛い女の子です。俗に言うツンデレです。

戦闘シーンの書き方が雑などの意見は多大にあると思いますが、温かい目で見守っていただけると幸いです。

1 - 2 ツンデレってなかなか面倒くさい

さて、これからどうするべきなんだろうか。既にドッキリだといふことには気付いたが、俺はいつまで騙されていればいいんだ？

幸い、六時間目に魔法の授業があるからその時になにかしらのオチで終わるんだろうが、それまで騙されているフリを続けないといけないのは正直つらい。どうしたもんか。

しかし今はそれ以上につらいことがある。俺は編入生という立場だから、当然のように俺のことを一目見ようと他のクラスから大量の生徒が集まっていた。中には積極的なアプローチを仕掛けてくる女子もいて、昼休みの半分をそれらの生徒をあしらうのに使ってしまった。

しかし、編入生っていうのはそんなに珍しいものなのか？ まるで初めて東京にやってきたパンダのような扱いだ。今なら動物園にいる動物たちの気持ちが分かる気がする。

まあ、パンダは一見愛らしい表情に見えるかもしれないが、その実はとても恐ろしい生物だ。

パンダは笹を食べることで知られるが、あれは正しいイメージじゃない。中国にいる野生のパンダの主食は動物の肉であり、笹の葉は人間で言うところの「歯磨き」程度の役割しか果たさない。もしワンリングルのようなものがあつたらぜひともパンダに装着してみたい。多分、

「おうこらじろじろ見てんじゃねえぞ人間共。こんな高い柵に囲まれてなかったら俺は今頃てめえら全員阿鼻叫喚の地獄絵図に叩き込

んでやるぜヒヤツハアア！」

という子供だったら全力で泣き出すこと間違いなしなビックリモンスターに早変わりすることだろう。まあ、パンダのことを語っていても仕方ないから続きはウェブで。

「ちょっと貴方、今よろしいかしら？」

「あ？」

バカな妄想の途中に頭の上から声をかけられて顔をあげると、金髪の綺麗な女子が腕組みをして仁王立ちしていた。やっぱり欧米の方のようで、瞳は薄く青のかかった碧眼で、肌はこれまた透き通るように真っ白だった。

さらに、制服のデザインが他の生徒と少し違う。いわゆる金持ちがよくやるオーダーメイドというやつらしく、その女子がなにかしらの貴族もしくは金持ちの娘だというのが見て取れた。制服の胸のあたりにある校章の下にイギリスの国旗が刺繍されている。

「貴方、お名前は？」

「普通、人にも訊ねる時は自分からじゃないのか？」

質問を質問で返すと、その女子は嘆くように頭を振った。

「なんですそのその態度は！ 私自ら話しかけているというのですから、貴方もそれに応じた態度でもって然るべきではありませんの！？」

どうでもいいけど日本語上手いな。日本語って世界でもかなり難しい言語の一つだった気がするけど。

「悪いけどさ、転校してきたばかりで君の事知らないんだ。君がどれだけ偉いのか知らないけどさ、やっぱり慎みっていうのは必要だと思っよ」

いくら今の世の中が実力主義社会だっていつても、礼儀作法は必要だと思っし。

だが、俺の慎みは必要だというのを変なふうを受け取ったのか、その女子（そろそろ名前を教えて欲しいんだが）は突然激昂し始めた。

「誰が遠慮も知らない喧しい女ですって!？」

「は？ いや、別にそうは言ってな」

「上等ですわ！ 無知な貴方の為にこのわたくしが世の理を教えて差し上げますわ！」

「いや、別に頼んでないんだけど……」

なんか勝手に意気込んでいる女子を尻目に周りを見ると、ある女子のグループが目に入った。その女子たちは俺と目の前の女子について何かを話しているらしいが、ここからだとはよく聞こえない。

（もう少し……空間を繋げば聞こえるか）

俺は自分の耳の中と彼女たちの近くに異空間　俺は空間転移と呼んでいるが　を発生させ、その異空間を通して彼女たちの話を聞くことにした。

「あーあ、星野君もついてないね。転校初日からダイヤモンドに目付けられるなんて」

「あの子自分の才能を高く評価してるから余計質が悪いのよね」

「で、でも、星野君も悪かったと思うよ。ダイヤモンドにあんなこと言っちゃってるんだから」

どうやら俺は想像以上に厄介な奴に絡まれたらしい。

「ちょっと貴方！ 聞いてますの!？」

「聞いてないけど、何か？」

面倒だから手っ取り早く済ませてお帰り願おう。まだ昼飯も食ってないんだ。

俺が馬鹿正直に言ったからか、目の前の金髪は怒りが一周して逆に冷静になったようだ。まるで痛む頭を押さえるように眉間を指でつまんでいる。

「有り得ませんわ……どうして日本の男というのはこうまでも馬鹿なのかしら……」

その一言にカチンときた。

「どうしてイギリスの女つてのはこんなに無作法者なんだろうな？」

言ってから思ったが、俺はこの場にいるイギリス人の女子全員を敵に回したんじゃないだろうか。

周囲の視線は マズイ。なんかイギリス人らしき人たちの周囲に殺気が渦巻いている。

「貴方！ わたくしの祖国を侮辱しますの!？」

「そっちだって日本のこと侮辱しただろ」

ここまで来たら後には引けない。これから俺はろくでなしのレッテルを貼られていくんだろうが、俺の愛する日本のことを侮辱されて黙ってられる程俺は大人ではない。

「大体、文化としても技術としても後進的な国で暮らさなければいけないということ自体、わたくしにとつては耐え難い苦痛なのですわ！ このような学校が他に無いから仕方なくここに来たのであって、わたくしは」

「だったら国へ帰ったらどうなんだよ？ それに、文化としても技術としても言ったな？ 言っておくけど技術的にはイギリスなんて日本の足元にも及ばないぞ。それに、イギリスの文化なんて戦争ものばっかじゃねえか。日本の歴史と情緒溢れる文化を馬鹿にする資格なんてお前らブリティッシュには存在しねえんだよ！」

「な……言うに事欠いてわたくしたちをブリティッシュ呼ばわり……。もう許せませんわ！ 貴方はわたくしが正当な手段を持って粛清しますわ！」

ああ……なんか話がややこしい方向に……。いや、そう仕向けたのは俺か。って言うか、そもそもブリティッシュって罵倒語なのか？

「決闘ですわ！」

……決闘？

「まさか、俺と喧嘩しようってのか？」

「ええ。まあ、喧嘩といつてもわたくしがあなたを一方的に痛めつけるだけですけれど。この学年四位のエルザ「F」ディアマンテが」

.....
.....まさか俺と喧嘩しようって言う女子がいるなんて.....世界は
広いつて事か.....。

「ふう.....」

彼女には悪いが、俺は喧嘩なんてする気は無い。負けるのが怖いからとかそういう理由ではなく、俺が彼女と喧嘩しても勝負にならないのは目に見えてるからだ。大の男に喧嘩を売るんだから護身術か格闘技の心得はあるんだろうが、そんなもので俺とやりあうのは自殺にも等しい行為だ。

というか、彼女は俺のことを知らないんだろうか。俺ってその筋では結構有名人のはずなんだけど。

「ハンデが欲しければ付けてあげないことも無いですわよ？ もっとも、ハンデがあったとしてもわたくしの勝利は揺るぎませんが」

ほほう、随分な自信だな。

「逆に聞くけど君の方がハンデは必要なんじゃないの？ はっきり言って君が俺に勝つ確率は1%もないけど」

「確かに、普通の勝負ならわたくしは貴方に勝てないでしょうね」

なんだ、分かかってて言ったのか？ それはそれで問題があるよ
うな。

「でも、貴方は勘違いしていますわ」

「は？」

「確かに普通の勝負ならわたくしが貴方に勝つ可能性は限りなくゼロでしょう。しかし、この学院は知っての通り魔法学校なので、それがどういふことかお解かりかしら？」

また魔法か。そろそろそのくだりにも飽きたぞ。

「つまり、ただの編入生である貴方はこのわたくしには絶対に勝てないということですね！」

そう言っただけで彼女 エルザは制服のポケットから一枚のカードを取り出した。一見するとトランプのカードのようだが、カードには何か杖のようなものが描かれている。

「貴方には抵抗する隙も与えませんわ！ 来たれ！」

突然どこかの国の言葉を叫んだかと思うと、カードが白く発光しその形を杖へと変え ってちよつと待て。物質の分解と再構築？ しかも素粒子に分解してって、俺が今試行段階の最新技術じゃねえか。まさか既に完成してたっけ言うのか。ショックだ。

エルザの手元に出てきた杖は、先端部分に華美な装飾が施された、いわゆるロッドというものだった。

「速攻で決めますわ！ グラン・フェリア！」

エルザの掛け声と共に俺の周囲に突如炎が発生する。だが、そんなもので俺の心は揺らぎはしない。どうせ高性能なホログラムみたいなものだろう。その証拠に触っても熱くなんか

「っって熱っ！？」

これまさか本物なのか？ 確かに肌を焼くような熱は本物だが。

そんなことを考えていると、それまで俺の周囲で燃えていただけの炎が突然明らかな攻撃の意思を持って襲い掛かってきた。辛うじて炎の無い方へ飛んで避けるが、それまで俺がいた部分は熱によって溶解していた。

「……………」

どうやら考えを改めないといけないようだ。この世界に魔法なんてものがあって今だに信じられないが、そんな事を言ってる場合でもないらしい。

(少しぐらい本気出してもいいよな)

普通の女子に手を上げるなんてあまり感心できる行為じゃないが、このままだと俺が焼き殺される。俺は覚悟を決めることにした。

襲い掛かってくる炎を躲し続け、踏み込むタイミングを模索する。その結果、炎には一定の法則によって動かされていることが分かった。

(タイミングは一瞬。どうやらあのロッドを奪えば炎は消えるみたいだな)

見ていて分かった法則は一つだが、俺にとっては一つだけで十分だ。その法則は、炎は四回のホーミング後自動でエルザの元へ戻る。「このっ、ちょこまかと」炎の動きをしっかりと見極め、四回目のホーミング後に踏み込むために少しずつ距離を縮めることにした。

(まずは一発)

顔の数十センチ横を通過していく炎を尻目にその炎とは反対方向に飛ぶ。一回目のホーミングが発動し、俺の背後から炎が襲い来るが、それをしゃがんで躲すと後の二回も同じように躲す。そして四回目のホーミング。炎は俺の真上から降り注ぐようにして落ちてくるが、そのタイミングを逃さずに一気にエルザの元に詰め寄った。

「!？」

エルザが慌ててロッドを自分の前に突き出す、俺の狙いはそれだ。

呼吸を合わせて一瞬でエルザの手元からロッドを引き抜き、近くにあった棒とすりかえる。剣道の秘技、『無刀取り』だ。

「へえ、ルビーか。結構なもの使ってるんだな」

「えっ？」

手元のロッドが別のものにすりかえられたのに気付いたエルザが頓狂な声を出す。しかしそれも当然だ。無刀取りは剣道をかじった程度で出来る技ではなく、しかも取られたことにも気付くことは無いかから剣道では奥義の一つとなっている。そして、エルザからロッドを奪ったことで背後で燃え盛っていた炎が制御を失い、霧のように散った。

「今……何が起きたんですの……？」

ただの棒を構えたエルザが困惑の表情を浮かべる。

「だから言っただろ？ ハンデは無くていいのか、って」

俺は中学を卒業するまでの間に剣道の八段、空手の五段、柔道の七段、合気道の九段を取得している。前の学校では風紀委員に入っていて、校則を乱しまくる奴らと熾烈な戦いを繰り広げていたから相手を傷つけずに無力化する方法もいくつも知っている。そういう意味でハンデは必要ないのかと聞いたんだが、彼女は自分の力を過信してしまったようだ。結果として武器のロッドは俺に取られ、全く使い物にならない棒をつかまされている。

「ふ……………ふふっ」

「？ 何がおかしいんだ？」

突然エルザが笑みを漏らした。その笑いは自嘲のものではなく、まるで俺の愚かさを笑っているかのように背筋に冷たいものが流れる。

「まさかその程度、というわけではありませんよね？」

「どっという、ことだ？」

俺の声は自然と震えていた。そして、それを彼女に悟られないようにするので必死だった。

「それは」

「そのの二人！ そこを動かくな！」

エルザの声は突然の乱入者の怒声によって遮られた。目だけをそちらに動かすと、そこには手錠を持った女の人が仁王立ちしていて、凍えるような冷たい視線が俺とエルザを射抜いていた。

「許可の無い魔法戦闘は校則違反だ。エルザ、お前を懲罰房へと連行する」

「仕方ありませんわね。 貴方」

「な、なんだ」

エルザは口元を歪めて俺に向かって微笑んだ。その笑顔はとても魅力的なはずなのに、体中に鳥肌が立った。

「運が良かったですわね。あのままだったら、貴方をこの世から抹消することが出来ましたのに」

そのままエルザは乱入してきた女性にどこかに連れて行かれた。

しかし、あの時に感じた感覚はなんだったんだろうか。ロッドは奪ったし、彼女に何かが出来たはずがないのに。そう思って手元に視線を落として、ようやく彼女の言葉の真意が分かった。

手元からエルザのロッドが消えていた。だが、確かに抜かれた感触は無かった。

(まさか彼女も無刀取りを……?)

いや、そんなはずはない。無刀取りは剣道の秘技中の秘技で、一見しただけで使えるようなものじゃない。

(これは……俺の予想を上方修正しないといけないな)

正直魔法なんてものは未だに信じられないが、俺の力も信じられないようなものだしお互い様だろう。俺は何事も無かったかのよう

に自分の席に戻り、次の授業の準備を始めた。

「お前はもう少し我慢というものを覚える。毎回止めに入っているこっちの身にもなれ」

「……分かっていきますわ」

第一校舎から遠く離れた懲罰房。その一室で、騒ぎの元凶であるエルザがそれを止めに入った教師の新山皐月に説教を受けていた。

「そもそもお前は一年生のときから」

（はぁ、面倒なことになりましたわね……）

エルザは今回龍馬との争いを起こしたが、争いを起こしたことが自体は初めてではなかった。今までも少なからずそういったことがあり、その度に皐月に説教を受けているのだ。

エルザは自他共に認めるほどにプライドが高く、自身に対して敵対したり自分のことを認めなかったりする輩とは全くと言っていいほど話が合わない、と言うより合わせようとしない。今回龍馬に接触したのも、龍馬が自分に対して友好的な態度を取るか敵対心を剥き出しにした態度を取るかでこれからの接し方を決めようとしただけであったが、残念ながら龍馬は編入してきたばかりでエルザのことを全くと言っていいほど知らず、名前を聞かれたときに素で「人にも尋ねるときは自分からじゃないのか？」と聞き返してしまっていた。それがエルザのプライドに傷をつけ、結果的に先程の騒ぎになっていた。

（しかし、さっきのあれはなんだったのでしょうか……）

エルザが考えているのは先程の戦いの中で龍馬が使った、一瞬で持ち物を摩り替える技。エルザはそれを見るのもやられるのも初めてで、剣道の技に無刀取りというものがあることなどまったく知らなかった。

（転移魔法とも違いますし……幻覚系魔法の一種でしょうか……）

自身の魔法に関するデータベースを調べるが、相手に気付かれること無く持ち物を摩り替える魔法など存在せず、エルザは一層困惑していた。

（星野龍馬。調べる必要がありそうですね）

エルザは自分の知らない未知の魔法について調べるために、龍馬ともう一度コンタクトを取ることに決めた。

1・2 ツンデレってなかなか面倒くさい(後書き)

ご意見、ご感想お待ちしております。

1・3 **ずっと否定より少しでも受け入れたほうが気が楽（前書き）**

メインキャラ三人目です。一応茶道の家元の息子という設定です。

1・3 ずっと否定より少しでも受け入れたほうが気が楽

そしてやってきました六時間目。お待ちかねの魔法の授業です。

「ってちよつと待てい！」

俺の突然の怒声にクラス中の視線が集中するが、そんなものに構ってられない。

「星野君？ どうかしましたか？」

月詠先生が俺の奇行に困惑の表情を浮かべるが、困惑の表情を浮かべたいのはこつちだ。

「魔法の授業ってドツキリじゃなかったのか!？」

周囲から今更何言っただみみたいな声上がるが、そんなのはどうでもいい。

今俺たち二年二十四組の人間がいるのは、第一校舎から少し離れたところにある第六アリーナ。校内にアリーナがあるだけでも驚きなんだが、このアリーナは一つ一つが東京ドームと同じだけの人数を収容できるという恐るべきスケールのものだ。一学年が六十組まであるだけでも驚きなのに、これ以上俺を驚かせてどうするつもりだ。高血圧で殺す気か。

しかもこのアリーナ、第一から第十三まであるというからそれもまた驚きだ。一体国は何がしたいんだろうか。

まあそれはさておき、今重要なのは魔法云々のほうだ。リアル現代っ子である俺は当然魔法のことなんて信じてはいない。そんなのはゲームと漫画の中だけで十分だ。ゲームなんて全然やらないし、漫画なんて全然見ないけど。

「でも、星野君も魔法が使えるからこの学院に編入できたんですよ？」

「俺は魔法なんて一切使えません」

そもそも編入試験って、あのやたら簡単な小学生レベルのテストじゃなかったのか？ 俺、それ以外にはなにもやってないぞ？

「試験の問題は魔法文字で書かれているので魔力が無いと読めないんです。ちゃんと読めたつてことは、星野君は少なからず魔法が使えるということなんですけど」

「……………」

なんだろう。なんだか、魔法を否定するのがアホらしくなってきた。

うん。俺の力も魔法みたいなものだし、魔法があってもいいか。

「ちなみに、魔法ってどういう種類があるんですか？」

「あれ？ 開き直りましたね」

「否定するだけ無駄だって分かったんで」

しかし、俺この学院でやっていけるのかな？ 魔法なんて使える気がしないんだけど。魔法の実習が週に十時間ってことはテストとかどうなるんだろ。学科試験とかちゃんとできるのか？ 俺。

「魔法というのは実に色々な種類があるのです。一般的な魔法としては七つの属性が挙げられます。火、水、風、土、雷、氷、そして光です。これらは主に攻撃魔法として使われるのですが、自身を強化するための魔法や相手を状態異常にしたり幻覚を見せる魔法なども数多く存在します。それらの他に、どの属性にも分類されない転移魔法や使うことが禁止されている闇魔法などがあります」

なるほど。全く分かん。

「あ、そう言えば、さっき俺に決闘を申し込んできたエルザとかいう女子がカードからロッドみたいの出現させてましたけど、あれってなんなんですか？」

「え、エルザさんと決闘したんですか？」

あ、そっか。昼休みだったから先生たちは見てないのか。けど、あの時感じた嫌な予感は何だったんだろうか。あんなの海斗と喧嘩したときにも感じたことはなかったんだよな。

「なんだかいきなり絡んできたんで、適当にあしらいましたけど」

うん。嘘は言ってない……はず。結果的に俺の前から消えてくれたんだから。

「それはマズイことになりましたね」

え？

「星野君はエルザさんの家柄をご存知ではないのですよね。彼女は三十二代続く貴族の娘さんで、その権力はイギリス国王と同じかそれ以上と聞いています。その彼女と争いを起こすと言うことは、実

質イギリスと敵対するのと同じようなことなのですよ」

ああ、なんだそんなことか。だったら何の問題も無い。

「そのことなら心配ありませんよ」

月詠先生が「えっ？」と聞き返してきた。

「だって俺、イギリスの国王と面識ありますから」

そう。俺が前までいた東京にある巨大な学校、神流学園の校長であり理事長であり生徒会

長でありイギリスの国王でもある男、神宮寺海斗は俺の古い友人だ。ちなみに神宮寺海斗というのは日本での名前で、本国での名前はカイン＝Ｌ＝テルミラ。世界で一番の金持ちであり、俺と同じ弱冠十七歳で世界？の企業である神宮時財閥を一人で立ち上げた経営の天才。人心掌握術にも長け、六歳のときにハーバード大学を首席で卒業するレベルの頭脳に加え、圧倒的なまでのカリスマ性と確実に有言実行する程の行動力を持ち合わせた俺の最高の友人だ。

まあ、最近は実質神流学園のほうは理事会にまかせっきりだし、会社のほうも軌道に乗ってからは秘書のセシリアさんに任せっぱなしだったし、そう考えると最近は国政のほうにしか参加してないのかもしれないけど。

「星野君、君は一体……？」

「それより、俺が聞きたいのはあのカードのことですよ」

このままだと話がこじれてきそうだから話を元に戻す。月詠先生はまだ聞きたいことがあるようだったが、授業が始まってからもう

十分も過ぎている。これ以上授業を遅らせるわけにはいかないだろう。

「あ、そうでしたね。あれはアーティファクトというんです」

例えばこれですねと言って、月詠先生が作業着の胸ポケットからカードを取り出す。

「アーティファクト、日本語だと魔法具と言います。これは人によって形状が異なり、打撃武

器などの近接タイプや、杖やロッドのような補助タイプ、弓や魔法銃のような遠距離タイプなどがあります。その他にも、どう見ても武器としては使えないようなものやこの世に一つしかない分類のレアアーティファクト 簡単に言うくと魔導具ですが、この学院内でレアアーティファクトを持っているのは高等部の生徒会長とこの学年の二位だけです」

つまり、魔法具ってというのは魔力で出現する武器みたいなものか。

「もちろん、アーティファクトに頼らずに自身の拳や磨きぬかれた武術などで上のランクについている人もいますが、それらの人は」

「先生、ちょっとストップ」

「はい？」

「そのランクって何なんですか？」

さっきのエルザは学年四位とか言ってたけど。

「そのままの意味です。この学院は実力至上主義なので、ランクが上の人間が偉いということになります。星野君が先程戦っていたエルザさんは学年四位なので、この学年で四番目に偉い人間ということ

とになります」

なるほど。分かりやすい構図だ。

「ちなみに、このクラスには学年二位がいます」

「え？」

なんだろう。今聞き捨てならない言葉が。

「神羅木君、前に出てきてくれますか？」

後ろの方を振り向くと、一人の男子がゆっくりと前に出てきた。

「彼がこの学年の二位、神羅木大和君です」

大和という男子は俺の前まで出てきて足を止めた。

彼の第一印象。凄まじく落ち着いている。まるで静かな水面のよ
うな雰囲気を持っていて、同年代とはとても思えないようなほどに
芯が据わっている。

体格はそこそこ大柄で、身長は大体一八五センチくらい。体はと
ても引き締まっていて、何らかのスポーツをしていることが安易に
想像できた。短く切り揃えられた髪は立てられることなくそのまま
になっている。顔はいわゆる美形だが、ただのツラが良いだけのイ
ケメンとは違い、どこことなく武士を連想させるようなイメージを持
っている。

「神羅木大和だ。よろしく頼む」

そして礼儀作法がすっかりしている。丁寧に頭まで下げてきた。

「神羅木君、アーティファクトを出してください」

大和は分かったと言って制服の内ポケットからカードを取り出した。

「アテアット
来たれ」

またもどこの国の言葉か分からない言葉を発すると、大和の手元に扇子が現れた。よく見るとそれは舞の時に使うような扇子で、本人の雰囲気と相まって芸者のように見える。

「神羅木君のアーティファクトは風雲扇と言って、文字通り風を操る力に特化した魔導具です。分類的には鉄扇というものになるんですが、それを構成している金属は地球上には存在しないもので未だに解明が進んでいないんです。と、これはどうでもいいことでしたね」

「そのアーティファクトは俺も作るんですか？」

「はい。このアーティファクトは学生証の代わりとしても使うので、原則として生徒全員に作ってもらっています。アーティファクト自体はいつでも作れるんですが、作るためには所定の場所に行かなければならないのでそれがネックですね」

そう言って月詠先生が自分のアーティファクトを呼び出した。

「私のアーティファクトは見ての通り杖です。種類によっても違うんですが、私のアーティファクトは持ち主の魔力を増幅する効果があります。他にも、持ち主の回復力を高めるものや行動の速度を上げるもの、筋力を増大させる効果などがあります」

そうして聞いてみるとアーティファクトって魅力的なアイテムだな。魔法のことは未だに若干信じられないが、こんな便利なものがあるなら魔法があってもいいかもしれない。

「他に聞いておきたいことはありますか？」

「いや、今のところは」

いくら俺でも二十分も説明されれば分かる。要は、この学院では魔法が使えないとやっていけない、この学院内ではランクが高いものこそが正義。そういうわけだ。

「それでは、もう時間もあまりありませんが魔法の授業に入りたいと思います。今日からは、みなさんもお待ちかねの転移魔法です」

月詠先生の言葉を切っ掛けにクラスが騒ぎ出した。

「転移魔法ってなんだ？ テレポートみたいなものか？」

「転移魔法って言うのは、術者を任意の場所に移動させる結構な高等魔法なんだよ」

そう言っただけに話しかけてきたのは、教室での俺の席の隣にいるクラス委員長の鬼灯灯。ラクロス部に所属してるらしい。

ちなみに、彼女の学年内ランクは六十七位。六千人中の六十七位だから結構すごいのかもしれぬ。よく分からないけど。

「それじゃあ先生が実演して見せるので、ちゃんと見ていてくださいね」

そう言うと、月詠先生の様子が今までと一転、真剣な顔つきになった。

「座標確認、二三、六六、〇一」

多分だが、一番目の数が経度、二番目が緯度、三番目が地表からの高さだろう（相当に適当な考え方）。

ちなみに、後で聞いた話だと一番目は前方もしくは後方に移動する距離、二番目は左か右に移動する距離、三番目は地表からの高さだった。

ついでにこれも聞いた話だが、一度行ったことのある場所で座標の登録をすれば一々座標を確認する必要がないらしい。なんとも便利だな魔法。

「《転移》」

その一言を口にする、月詠先生の姿が一瞬消え、それまでいた場所から十メートルほど離れた場所に姿を現した。

「これが転移魔法の基本中の基本、《転移》です。それでは、全員散って始めてください」

転移魔法ってそれでいいの？ 俺もそれっぽいことできるぞ。

「先生」

「何ですか、星野君」

「俺、それっぽいことができますけど」

月詠先生が「えっ？」と聞き返してきた。

「でも、星野君は魔法が使えないんですよね？」

「魔法は使えませんがそれっぽいことはできます」

周囲から「そんな馬鹿な」といった声上がるが、実際にできるんだから仕方ないだろう。

「じゃあやってみせてくれますか？」

俺は立ち上がってクラスのみんなから少し離れる。そして右手を前に出す。これで準備は完了だ。

「じゃあ、始めます」

イメージは扉。それが自分の目の前に出現する感じで。

ルーム・トランスファー
「空間転移」

俺が自分の付けた技名を口にする、目の前の空間に大きな黒い穴が開いた。それは一つだけではなく、目の前の穴から少し離れた場所にもう一つ黒い穴が開いた。

それを何の気なしに通る。だが、俺が通り抜けた後も空間に開いた穴は閉じることなくその場に残り続けている。俺が消してないんだから当然っっちゃ当然なんだけど。

「こんな感じですけど」

「「「……………」」」

あれ？　なんだか周囲の反応が薄い。みんなして口がポカンとしてる。まるでエサを求めてる鯉のようだ。見たことないけど。

「星野君、今のは一体……？」

「俺の能力の一つ《空間転移》ですけど」

《空間転移》。俺の一番の能力であり、使い方次第では攻撃にも防御にも使える万能な能力だ。俺がこの力を使えるのに気付いたのは小学三年生の頃だったが、その時はこの力のことがよく分からずに、たまに使う程度だったが、海斗に会ってからこの力のことを知り、今では自由自在に操ることができる。

ただ、この力は使い勝手が良いが、防御に使うことはよくあっても攻撃に使うことは殆どない。使う相手が限られるし、攻撃力が高すぎるのが問題だからだ。いや、攻撃力と言うより切れ味が。

「あ、あれ？　魔法が使えない」

俺から少し離れた場所で魔法の練習をしていた女子が突然そんな声をあげた。どうやら二人組みで練習しているようだが、何かあったんだろうか。

「どうかしましたか？」

月詠先生がその女子のもとに駆け寄っていった。

しかし、なんで作業着なんだろうか。スーツが嫌いなんだろうか。似合いそうなのに、勿体無い。綺麗な人は何を着せても似合うって言うけど、作業着がここまで似合わない人も初めて見た。なんでだ

ろう。

そんなことを考えていると、その女子と月詠先生の会話が耳に入ってきた。

「他の魔法は使えないんですか？」

「いえ、何でもか転移魔法だけ使えないんです」

「座標は確認しましたか？」

「はい。でも、魔力を練っても途中で霧散しちゃって」

はて、なんでだろうか。他のクラスメイトたちはというと、

「あれ？俺も使えねえ」「あたしも使えない。何で？」「何でだ？先生のやったとおりじゃってるのに」「おかしいなあ。教科書に書いてある通りにやってるのに」

他のみんなも使えないみたいだ。

ていうか、教科書ってなんだ？俺、そんなの貰ってないぞ。

「一体どうしてでしょうか」

月詠先生も困ってる。どうやら先生にも理由が分からないようだ。

「あ」

しまった。忘れてた。

「？星野君、どうかしましたか？」

「すみません、俺のせいです」

またもクラスメイトの視線が俺に集まる。俺と同じ力を使う奴なんて今までいなかったから失念していた。

俺はアリーナの中に浮いている空間の穴を消去し、空間内に発生した捻れも元に戻す。俺の能力は空間そのものを捻じ曲げるようなものだから、能力を使った後はねじれを治さないと誰も転移ができなくなるんだった。

その旨を月詠先生に告げると、先生は得心したように「そうだったんですか」と言った。

しかし、こうなると学院内で《空間転移》は使えないな。いろいろと問題が起こる。

「あ、そうだった」

突然月詠先生がそんな事を言った。なにがそうだったんだらうか。

「星野君もアーティファクトを作らないといけませんよね。授業が終わったら作りに行くので、教室には戻らずにここにいてください」

ああそっか。アーティファクトのカードは学生証としても使って言うてたし、無いと俺が困るのか。もしある程度は自分で選べるんなら、やっぱり刀か太刀がいいな。どっちも使い勝手がいいし、使い慣れたるものを使いたい。そう言えば、ここの学院の生徒で帯刀してる奴をたまに見かけるし、持ち歩いても良いのか。

そんな感じで、初の魔法の授業は終わった。

1・3 **ずっと否定より少しでも受け入れたほうが気が楽（後書き）**

ご意見、ご感想お待ちしております。

1 - 4 魔法ってほんとにあったんだな……。 (前書き)

閑話みたいなものです。

1 - 4 魔法ってほんとにあったんだな……。

「それじゃあ星野君、ここに手を置いてください」

月詠先生が目の前にある石碑の上に手を置くように促す。俺はそれに従い、石碑の上に手を置いた。

俺が今いるのは、第一校舎の地下三階にある魔導具保管庫。扉が嚴重に施錠されていて、管理人の人がここを守っているらしい。周囲には色々なものが保存されているが、どれも見た感じは『いわゆる『つきの物』』のようで、禍々しい雰囲気とはまた違ったものを発している。

「それではこれから星野君のアーティファクトを作ります。星野君、そこにあるナイフで自分の人差し指を少し切って、血で自分の名前を書き記してください」

俺は月詠先生の言うとおり、石碑の横にあつた石で作られたナイフで自分の人差し指を切り（石には薄く血痕が残っていた）、石碑に自分の名前を書いていく。

「あれ？」

石碑に名前を書いていくのは良かったが、書いた文字が石碑に吸い取られるようにして消えていった。

「大丈夫です。本人の名前と血から得る情報によってアーティファクトを作り出すので、何も心配することはありません。でも、気分が悪くなったら言うってくださいね」

そこまで聞くと、石碑が突然発光し始めた。光は一気に膨れ上がり、保管庫は一瞬で光に埋め尽くされた。そのまま十数秒もすると光の洪水がようやく収まり、もとの明るさに戻った。

目をゆっくり開くと、石碑の上、自分の手の中に一枚のカードが現れていた。

「成功ですね。お疲れ様でした」

「はあ」

成功ですって、失敗もあるのか？

とはいえ、これで俺もアーティファクトを手に入れたんだ。ようやくこの学院の生徒ってことに

「なんだこれ？」

カードに描かれているものを見て、俺は不思議に思った。

そこに描かれていたのは、一冊の本。黒い表紙のそれは、昔海斗に見せてもらった『魔道書』というものに酷似していた。

「何かありましたか？」

術式の処理を終えた月詠先生が俺のそばに寄ってきた。

「俺のアーティファクト、なんか本みたいなんですけど、これって補助タイプのもんですか？」

「？ ちょっと見せてください」

手元のカードを月詠先生に手渡す。

「これは……！」

「どうしたんですか？」

何かあったんだろうか。

「い、いえ、なんでもありません。もうホームルームも終わってる頃だと思うので、今日はもう帰って良いですよ。星野君の部屋は第二男子寮ですので、そこに行けば自分の部屋を教えてください。荷物はもう届いているはずなので、ルームメイトに手伝ってもらったりしてください。それでは」

そうやって先生は保管庫から急ぎ足で出て行った。

「なんだっ たんだ 一体……」

俺の質問に答えてくれる人はいなかった。

暦は龍馬と別れた後、急ぎ足で第一校舎の十六階にある理事長室まで来ていた。普段なら定期報告をすればいいだけなのだが、今回はいつもと事情が違った。

「失礼します」

理事長室の大きな扉を開き、中に入る。すると、奥の机で作業をしていた理事長が顔を上げ、暦の目を見据えた。

「どうかしたかね？」

葉盟学院の理事長は今年八十になる老人だが、魔法で細胞の老化を遅らせているためとて八十には見えない。どう見ても四十代で、しかしその体に纏う雰囲気は長い年月を生きてきた人のそれだった。

「今日この学院に編入してきた星野という生徒なんですけど、
彼がどうかしたかね？」

理事長はちゃんと聞いているような、聞き流しているような態度で暦の言葉を待つ。暦もそれは分かっていたが、一々指摘しても無駄だということは彼女が理事長の教え子だった頃から知らされてきているので、暦はそのまま言葉を続けることにした。

「先程彼のアーティファクトを作ったのですが、普通では有り得ないものが発現してしまって」「
有り得ないものとは？」

普通では、という言葉に理事長が鋭く反応する。普通じゃないことが日常的に起こるこの学院の中にいる教師が、普通では有り得ないと言っただから気になるのも当然で、理事長は年甲斐もなく自分の胸が高鳴るのを感じた。

だが、暦はそれを言うべきかどうか迷った。自分のクラスの龍鳳がレアアーティファクトを発現させたときは迷わずに理事長に報告したのだが、今回のケースはあまりにも稀　　と言うより、絶対に有り得ない事態が起きたということで報告すべきかせざるべきか迷っているのである。

しかし、ここで言わずとも後でその事は理事長に知られ、なぜ報告しなかったのかと糾弾されるのがオチだと思い、暦はありのままを話すことにした。

「……コード・オブ・ザ・ライフメイカー《造物主の掟》です」

「なっ」

《造物主の掟》。それは魔導具などという生易しいものではなく、神具と呼ばれるものだ。文字通り、神の使いし道具であり、その能力は完全に未知。しかも、攻撃に使うにしても防御に使うにしても補助に使うにしても、絶対的な力を得ることができる究極のアーティファクト。それが 《造物主の掟》。

「まさかそれを手に入れる生徒が現れるとはな……」
「いかが致しましょうか」

暦はいかがと言ったが、その言葉に含まれた意図は、監視をつけるか始末するかの二つで、暦の職務そのものの内容だった。

「今は様子を見よう。それで彼が我々に敵対するようなら始末、友好的なら受け入れよう」

あくまで緊急の措置だが、理事長でも今すぐ龍馬をどうこうできるわけではないのでこの措置にとどまった。

「報告は以上です。失礼します」

そう言って暦は理事長に一礼した後、素早い動作で理事長室から出て行った。

『彼が私たちに着くか、それとも彼らに着くか、今後が楽しみだ』
『ですが、その子を放置しておくといずれ我々の計画に支障がでる
恐れが』

『今は見守りましょう。我々は別に彼らと戦争をしたいわけではな
いのですから』

1 - 5 幼馴染の美少女ってドキドキしない？(前書き)

この辺りはあまり変更はありません。

1 - 5 幼馴染の美少女ってドキドキしない？

「ここか。俺の部屋」

俺は部屋番号を確認して部屋に入る。3016室で合ってたよな？
明かりが付いてるから鍵を使う必要は無いだろうけど。

てか、寮で三十階あるって言う時点でかなりアレだと思う。しかもその最上階。どんな特別待遇だ、俺。

まあいい。とりあえず部屋に入ろう。

ガチャ。

部屋に入ってまず最初に目に入ったのは囲炉裏だった。………
囲炉裏？

よく見ると、部屋は和で一色だった。一つの部屋は基本的に3LDKなんだが、その全てが和で統一されている。玄関の横に釜が置いてある時点で俺の予想の範囲外だ。まるで、時代劇に出てくるような感じだ。

「あ？ 誰かいるのか？」

部屋を観察していると、玄関の方から声が聞こえた。なんだか聞き覚えのある声だけだ。

「ああ、相部屋になった者か。すまん。隣の部屋に行ってたんだ。俺は神羅木大和。これから一年、よろしくたの って、なんだお

前か」

そこにいたのは、俺と同じクラスで学年二位の実力を持つ男。普段着なのか作務衣を着ていて、この部屋の印象にピッタリだった。

「今日から俺にもルームメイトができるって聞いてたんだが、それが渦中の編入生だったとはな。俺の運の良さもここまでらしいな」

なんだろう、渦中って。俺って有名人なのか？

「まあいい。これからは一緒の部屋で暮らすんだ。多少のトラブルも受け入れていかないと、これから何か起きたときに巻き込まれる可能性も大きくなるからな」

余計な柵しがしめは御免だ。そう言って大和は畳張りの部屋の方へ歩いていった。

「なあ、神羅木」

「大和だ」

まだ知り合って間もないため苗字で呼んだんだが、それを瞬時に遮られた。名前で呼んで欲しいのか？

「ルームメイトになるって言うのに、そんな他人行儀でどうするんだ。俺は人との繋がりを大切にしたいと思ってから、初対面の相手も名前で呼ぶし、言いたいことははっきりと言っぞ。お前はどんなんだ？」

「どつって……」

俺も、できる事なら誰とでも分け隔てなく接したいと思ってる。

でも、今までも俺の考えを受け入れてくれる奴は殆どいなかったし、これからもそうだと思っていたから大和の言葉に「そうだな」と言うことは難しい。それに、俺は他の奴とは根本的に違う。俺と関わりを持つことで、大和も変わってしまうんじゃないか、それが心配だ。

だが、大和の目はとても真っ直ぐで、一点の曇りもない研ぎ澄まされた目をしていた。恐らく、こいつもこいつでいろいろなることがあつたんだろう。

もしかしたら、こいつなら俺の考えを受け入れてくれるかもしれない。

「……そうだな。俺のことは龍馬って呼んでくれ。よろしくな、大和」

「よつやくお前の目になったな」

「目？」

俺の目がどうかしたのか？

「今までのお前の目、まるで何かに対して怯えているようだった。けど、今のお前の目は前を向いている。あいつの言ってた通りの目にな」

そこまで言って大和は玄関の方に歩いていった。玄関の方に何かあるのか？

そう思って大和についていくと、大和は勢いよく玄関のドアを開いた。

「ぐあっ！」

ゴン！！ という鈍い音がしてドアの向こうにいた誰かがうめき声を上げる。しかしあの開け方、普通の奴だったら頭蓋骨陥没してるぞ。多分。

大和はそのままドアを大きく開け、俺らの部屋の前で蹲ってた男子を部屋に引きずり込んだ。未だに押さえられた額からは薄く血が流れている。そして、その男子をリビング（さっきの囲炉裏があった部屋）まで引きずっていった。

「で、こいつは？」

俺の目の前で大和に縛られた男子生徒は、全身を鎖で縛られて床に転がされていた。ご丁寧に猿轡までして、大和の手際によさに軽く引いた。

「俺の友人だ。いや、だった。さっきまでは」

大和の口調からは、はっきりとした怒りが感じ取れた。それが何に対してのものかは分からないが、俺には事情が飲み込めないから曖昧に頷くことしかできない。

とりあえず猿轡を外し、この男子に話を聞くことにした。

「大丈夫か？」

「ああ……。おい大和、いきなり何しやる」

「馬鹿がいたから始末しようとしただけだ」

おい大和、なんだそのゴミが出たからゴミ箱に捨てる、みたいな

考え方。言いたいことははっきり言うにしても限度があるだろ。まあ、この二人が付き合い長いつてことは分かるけど。

「しっかし龍馬、お前も変わらないな」

「俺の事知ってるのか？」

この学院に俺の事知ってる奴なんていないはずだけど。

だがこの男子生徒のこと、俺もどこかで見たような感じがする。いや、見たような、とかじゃなく、ずっと前から知ってるような…。

ポクポクポクポクポクポクポクポク……チーン。

思い出した。そうだ、こいつは……。

「まさか、仁か？」

「ようやく思い出したか、泣き虫リュウちゃん」

「ばっ、おま、いつの話してんだよ！」

そう、ようやく思い出した。こいつは幼馴染の竜堂仁だ。幼馴染って言っても、俺が小学三年生の頃に引越したつきりだから、かれこれ七年ぶりぐらいになる。あの頃の仁は校内でも有名なじめっ子で、俺もよく苛められた。昔の話だが。

「しっかしお前……」

「なんだよ」

そう。俺はいつかこいつに再会したら言いたいことがあったんだ。それを今、言います。

「俺さ、いつかお前に言いたいことがあったんだ」
「なんだよ？」

さつきとはイントネーションを変えて仁が聞き返してくる。そのツラ、悔しそうな顔に変えさせてやるよ！

「久しぶりだなチビ。もう少し牛乳飲んだほうがいいぞ？」
「（ガーン！！）」

言っただけ。いつか言いたかったこと。なんて言っただけ、今の俺の身長は192センチ。今の仁の身長は目測で160センチ強。その差、実に30センチ！あの頃は身長が一向に伸びず、性格も若干内気だった俺は仁によくチビ、泣き虫と言われてからかわれていたが、最早仁にそんな事を言う資格はない。俺は勝ち誇ったように腕組みをして、床に転がされたままの仁を遥かな高みから見下ろした。

俺の想像通り仁は悔しさと羞恥で顔を真っ赤にして、体をブルブルと震わせはじめた。

「なんだよ、悔しかつたらあと三十センチくらい伸ばして」
「龍馬、その辺にしとけ」

優越感に浸ったままで勝者の言葉を言い続けていた俺だったが、大和の一言で現実に引き戻された。

「こいつキレると厄介なんだから、あまり刺激しないで欲しいんだ
が」
「龍馬」

大和の言葉を遮るようにして仁が声を出した。その声はまるで地の底から響いてくるようなほどの低い声で、昼休みにエルザに対して感じた嫌な感じと同じ感じがした。

「お前、俺のランクがいくつか知ってるか？」
「は？」

仁のことだから結構上だとは思っけど、それでも大和より上なんてことは無いはず。

「俺のランクは、一位だ」

ドン！！ という音と共に仁の体から何かが噴き出す。それは金色の光を纏っていて、昔読んだ何かの漫画に出てくるキャラクターを彷彿とさせる光景だった。

「来たれ」

仁がアーティファクトを呼び出すための始動キーを口にした途端、仁の体を縛っていた鎖が大きな音を立てて弾けとんだ。しかも、弾けとんだ鎖の断面は何か鋭利な刃物で切り裂かれたようになってい

る。
「仁、あんまり部屋のもの壊さないでくれよな」

大和がまるで対岸の火事を見るような様子でそう言った。そして、仁がその言葉を合図に俺の目の前に踏み込んできたとき、俺は仁のアーティファクトの全貌を見た。

形状はナイフ。いや、これは確かダガーとかいう分類のもので、それが両手に二本。つまり、ツインダガーだ。装飾はシンプルだが、その切れ味は食らうまでもなく凄まじいものだと分かった。なぜなら、空を裂いて迫ってくる音が昔聞いたソニックブームというものによく似て　　ってうわあっ!?

間一髪で仁の斬撃を躲し、壁際まで一っ跳びで下がる。すると、俺の足に何か固いものが当たった。仁の行動に注意しつつ視線を下にずらすと、そこには見慣れた細長いものがあつた。

長さにして四尺二寸のそれは、俺の愛刀である『絶刀・神流』^{かなな}だった。俺はそれを踵で蹴り上げ、後ろ手にそれを掴むと右手で柄の部分を掴み、それを一息に抜き放つた。引き抜くと共に白銀の刀身が蛍光灯の光に当たり鈍く輝き、そこにいた俺と龍鳳と仁の目を眩ませた。

「これで条件は同じだぜ、仁」

攻撃速度に優れるツインダガーだが、使う人間は大体力が弱い場合が多い。仁の体は見た限りでは非力には見えないが、俺とは比べ物にならないだろう。対して、俺は昔から刀や太刀を使つての戦闘訓練をしてきたおかげで、一振り数十回斬るような技も身につけている。攻撃速度の面では比べるまでもないが、一発で与えるダメージの量なら俺が確実に上回るだろう。しかも、俺の神流には特殊能力がある。

だが、仁は冷静だった。普通に考えたらどう考えても有利なのは俺なのに、まるでこうなることは予想の範囲内だと言わんばかりに落ち着いている。その落ち着きが何か奥の手を隠しているように思えて、俺の足は止まってしまった。

「もしかしてさ」

仁は含み笑いをしながら俺に語りかける。その口調は落ち着いていて、だが底には俺を嘲笑うような感情が感じられた。

「武器があれば俺に勝てるとか、そんな幻想を抱いてるわけじゃないよな？」

背筋に冷たいものが流れる。それが自分の汗だと悟るまでに、相
当な時間を有した。

「どうして俺がこの学年の一位に君臨してるか、少しは考えなかつたのか？」

仁は俺のすぐ側まで寄ってきて俺を見上げる。だが、仁から放たれるプレッシャーによって自分が仁より小さいかのような錯覚を覚えた。そして俺は悟った。今の俺じゃこいつには勝てない、と。

「ふっ。なんてな」

突然仁から放たれていたプレッシャーが消え、俺の体は糸が切れたように膝から崩れ落ちた。しかも足は恐怖に震え、まるで体が凍っているかのような感覚を味わった。

「まあ、今のお前じゃ俺に勝てないって分かったただけ一歩前進だな。大和、お前はと思う？」

「なんとも言えないけど、少なくとも今の龍馬じゃ俺ら一桁には遠く及ばないな。まあ、五十位程度に互角ってところだろ」

「そんなもんか。ま、こいつだったら一月もあればエルザと互角に

戦えるぐらいに成長するだろ？」

「あー……、そのことなんだけどな」

大和が言いにくそうに語尾を濁す。俺はようやく震えの止まった膝に一喝してなんとか立ち上がり、話の輪に加わろうとした。

「そのエルザってやつとはもう接触してる」

よく考えたらあいつも学年四位とか言ってたな。他の奴らがどの程度か分からないけど、大和は言うまでもなくあのエルザよりは強いだろうし、一桁台の強さは常軌を逸してると考えた方がいいだろうな。

「龍馬……、お前厄介な奴と関わっちまったな……」

「ああ。全くだ」

会って早々に人の事罵倒してくるような女だったしな。

「多分お前俺が思ってるのと全然違うこと考えてるぞ」

そうなのか？

「俺が言ってるのは、エルザのこの学院における影響力だ」

むう……学年の四位ともなるとそうということもあるのか。ファンクラブとかか？

「間違っではないけどそういうことじゃねえ。これ言うのは軽く癪なんだけどな、あいつは見ての通りお嬢様だし、顔やスタイルも

極上のレベルだ。加えて、この学年だけであいつの取り巻きは二百人以上はいる。あの性格のせいで女の味方は皆無だけど、一番厄介なのはあいつの親衛隊の中に学年の六位と八位がいることなんだよ。八位はともかく、六位は俺や大和でも梃子摺るレベルでやたら血の気が多い過激派の一人だからな。明日までに俺とお前が幼馴染だつて言う情報をリークしとくから表立って襲ってくることはないと思うけど、それでも油断はできないしエルザが命令すれば日の下でも襲ってくるから注意は必要だな」

「それは……また厄介だな」

「ただ、あの女にも弱点はある」

仁が大和の方を見ると、大和は授業で使うようなノートと鉛筆を仁に渡した。

「いいか？ 魔法つてのは説明されたかも知れねえけど、火、水、風、土、雷、氷、そして光っていう七つの属性がある。人には得手不得手つてのがるように、俺が得意なのは氷で苦手なのは土、大和は殆どの属性を使えるけど火だけが使えねえ。ここで問題なのがエルザの魔法の傾向だが、あいつは火が得意で他の全てが使えないま、一点特化型だからその分火属性だけなら学年どころか学院内でもあいつに敵う奴はいない。けど、重要なのはそんなことじゃなくて魔法の効果だ」

仁がノートに円を書き、その所々に文字を書いていく。

「火が水によって消されるように、魔法には相性つてものがある。火は水よりも弱く、水は雷に弱い。雷は風に弱く、風は氷に弱い。それで、氷は土に弱く、土は火に弱い。これが魔法の相性表だな」

円に六つの属性が描かれ、それぞれを矢印が結ぶ形になっている。つまり、エルザに勝ちたいなら水属性の魔法を使えるようになるかとマズイわけだ。

「なあ仁、なんで光だけが円から外れてるんだ？」

七つの属性なんだから、光属性の魔法もなんらかの苦手属性があるはずじゃないのか？

「光魔法つてのは基本的に補助効果を持つものばかりだからな。まあ、一例だと回復魔法とかだな」

つまり戦闘上の攻撃能力は皆無に等しいと。分かりやすい説明で何よりだ。

「それはそうと、お前の得意属性つてなんなんだ？」
「知らん」

大体、魔法も使えないのに得意も苦手もあるか。

「アーティファクトは作ったんだろ？ だったらカードに自分の得意な属性の紋章が描かれるはずなんだけどな。ちよっと貸してみ？」

俺は制服のポケットからさっき作ったばかりのカードを取り出し仁に手渡す。

けど、月詠先生俺に何の説明もしてくれなかったな。俺のアーティファクトを見た瞬間に血相変えてどっかに行っちゃったし……明日聞いてみるか。

考えるのをやめて仁たちのほうに向き直ると、仁と大和が俺の力
ードを見て絶句していた。口は半開きになっていて、とても学年の
トップ二人が晒すような顔とは思えない。

「どうした？ 何かあったのか？」

「うえっ！？ べ、別に何も！？」

俺の言葉でようやく意識が戻ったのか、仁が素っ頓狂な声をあげ
る。何も無かった奴の反応じゃなかったと思うんだが。

「お前これ……マジなのか？」

「何が？」

二人揃ってどうしたって言うんだ。さっきまで落ち着き払ってい
た大和まで動揺してるし。この程度で動揺するってどうよう？

「……なんか下らないギャグ考えただろ」

「何のことだ？」

根拠のない発言は身を滅ぼすことになりかねませんことよ？

「ぶっ……」

仁が手に持っていたノートを筒状に丸める。チャンバラでもする
つもりか？ 俺が持つてるのは真剣だぞ？

スパーン！ いやあ、実にいい音が ってちよっと待て！

「仁、いきなり何しやがる！」

「社会のクズがいたから叩いただけだ」

何だっつてんだよ全く。ちょっとギャグを思いついただけじゃないか。

「なあ龍馬、これって本当にお前のアーティファクトなのか？」

一つ咳払いをして大和が俺に問いかける。

「間違いないはずだけどな。石碑に自分の名前書いて作るんだろ？」

「ああ、じゃあいいのか」

月詠先生もこんな感じの反応だったけど、もしかして凄いいレアなものなのか？ レアアーティファクトは高等部だと龍鳳と生徒会長しかもってないらしいし、だからこんな反応になるのか。

「で、結局俺の得意属性ってなんなんだ？」

「ああ、そんな話してたっけな」

仁は再びノートを開いて、今度は何やら絵を描き始めた。

「これが俺のアーティファクト、《絶対零度》^{アイス・エイジ}だ。このアーティファクトの後ろに描かれているのが氷の紋章で、まあこんな形をしている」

仁が示した氷の紋章は、菱形の中に十字架が描かれた青い色をしたものだった。

「あれ？ お前のアーティファクトってツインダガーじゃなかったのか？」

仁が差し出したカードに描かれていたのは、鎖のようなものだった。

「ああ、俺はアーティファクトを二つ持ってたよ。自分の得意属性を極めると、学院の統括理事会から何も描かれてない真っ白なアーティファクトを渡されてな、自分の好きな形にアーティファクトを造型出来るんだよ」

これは俺の元々のアーティファクトだ、と言って仁が手に持ったカードを弄る。

「二つ目のアーティファクトも氷属性の武器だからな、名前は《凍^{アイス}ブランドてつく爪》。俺が学年一位の座にいるのもそれが理由なんだよ」

「仁、話がずれてる」

大和が話を元に戻す。

「さつき見せたけど、これが俺のアーティファクトの風雲扇。後ろに描いてある紫の雲が風属性の紋章だ」

大和は仁が持っていたノートを引っ手繰って、新しく出した鉛筆で高速で絵を描いていった。

「これが火の紋章。見ての通り炎をイメージしたもので、シンボルカラーは赤。で、土の紋章は山をイメージしたものでシンボルカラーは緑。雷はそのまま雷をイメージしたもので、シンボルカラーは黄色。水は雫をイメージしたもので、シンボルカラーは水色。最後に、光は太陽をイメージしたもので、シンボルカラーは白だ」

なるほど。仁の説明よりも簡潔で分かりやすい。

「けど、お前のアーティファクトには問題があるんだ」
「問題？」

大和が俺にカードを手渡してくる。それは俺が龍鳳たちに渡した俺のアーティファクトで、それを見て大和の言う問題に気付いた。

「これ……どの紋章とも違うな」

俺のカードに描かれていた紋章は、黒い輪に楔のようなものが生えた形をしていて、その周りに薄く赤い光を纏っていた。

「俺も文献でしか見たことがないんだが、それは闇の紋章だ」

「闇の紋章？」

「俺らが学院で普通に習う魔法はさっき言った七種類だけ。けど、闇魔法は魔法世界の条例に違反するから、教えるのも禁止されてるし伝えるのも禁止されてる。しかも、闇魔法に　　と言うか、闇の魔力に適性を持つ人が全然ないからある種幻の属性だつて言われてたんだけど、まさかこんな所で出会うことになるなんて……」

よく分からないけど、闇魔法が滅多に見れないことだけは分かった。月詠先生がああいう反応をしたのもこれが原因か。そりゃあ、俺だつてこんな得体の知れないものの素性を知っていたら……ん？
この場合、得体の知れないものって俺になるのか？　それはそれでいやだな。

しかも俺の得意属性が闇魔法つてことは、俺に魔法を教えてください人はいないのか？　その辺はどうなんだろうか。

「いや、問題はそこじゃないな」

そんなことを考えていると、大和が不意にそんな事を言った。問題はそこじゃないって、じゃあどこが問題なんだ。

「一番厄介なのはお前の」
「ん？」

何かを言いかけた大和が突然黙った。視線は俺の後ろ、玄関のドアに向かって注がれている。仁のときみたく、また盗聴してる「別に盗聴してたわけじゃねえ」奴がいるんだろうか。

大和はゆっくりと立ち上がり、足音を立てずに玄関の方まで歩いていく。仁も何らかの気配を感じ取ったようで、自身の気配を殺して龍鳳の後ろへと歩み寄った。

「（誰かいるな）」
「（けど、インターホンも鳴らさずに何してんだ？）」

まるで蚊の鳴くようなほどの小さな声で大和と仁が会話をする。俺のほうにも辛うじて聞こえるが、俺はそこまで小声で喋ることは出来ないから黙っておくことにする。

「（男か？）」
「（いや、女っぽい）」
「（一人か？）」
「（気配は一つしか感じないし、そうじゃねえか？）」
「（よし、じゃあ一気に開いて盗聴者を確保。仁はアーティファクトで拘束してくれ）」
「（分かった。そんじゃ、一、二の三！）」

その頃の龍馬たちの部屋の前。そこには一人の女生徒が自分の作った惣菜を片手に立ち尽くしていた。

彼女の名前は姫城愛華^{ひめぎょうあいごか}。竜堂仁と星野龍馬の幼馴染であり、葉盟学院高等部二年の学年三位である。彼女の所属クラスは二年七組で龍馬たちのクラスとは一階違う。そのため、今日入ってきた編入生の情報がリークされるのが遅く、その編入生が自分の好きだった幼馴染だと知ったのは放課後のホームルームが終わり、龍馬と同じクラスの委員長である鬼灯灯と部活動をしているときだった。

(まったく……仁も教えてくれたらよかったのに……)

これも同じ部の友人に聞いた話だったが、仁の所属である二十一組には昼休みの時点で情報が回っていて、しかも学年四位であるエルザと編入初日にいざこざを起こしたとして、その話は二十一組から四十組まである八階には完全に回っていた。つまり、仁はその編入生が龍馬だと知った上で愛華には何も言わなかったことになる。

(でも、龍馬もいきなり訪ねてきたらびっくりするよね)

仁が何も教えてくれなかったことには憤りを感じていたが、そこは恋する十六歳。自分の好きな人が、会おうと思えばいつでも会える場所に来たことに胸は一杯だった。それも、都合のいいことに龍馬の部屋は仁の部屋の隣。仁の部屋にはたまに作りすぎたおかずをお裾分けする時に訪ねているが、これからは自分の好きな人に自分の料理を食べさせてあげられるということデーションが否応無しに上がってしまうのだった。

それにしても　と愛華は思った。今日は仁が所属しているバスケット部の活動はないはずで、同じ部の大和も部屋に戻っているはずだったが、目の前の部屋からは何の物音も聞こえない。大和の部屋ではいつも囲炉裏の中で炭が燃えているので、いつもならそれが弾ける音が少なからず聞こえるはずだが、今は何の音もしない。

（もしかしてどこかに食べに行っちゃったのかな……）

だが、仁はともかく大和は毎日自炊をしているはずなのでどこかに食べに行く、というのは考えられない。ただ、今日は大和にとっては念願のルームメイトが出来た日でもあるため、仁が懐かしさ余って連れ出した、と言う可能性もなくはない。

（しょうがない。明日龍馬のクラスに行ってみよう）

そう思い踵を返そうとすると、目の前のドアが凄いい勢いで一気に開いた。何事かと思いきやちらりと視線を向けると、そこには大和が自分のアーティファクトを召喚した状態で愛華に飛び掛かろうとしているところだった。しかもその後ろには仁が、こちらも自分のアーティファクトを召喚して構えていた。

「は？」

大和が愛華の姿を確認してそんな声をあげる。だが、既に大和と愛華の距離は数十センチ。愛華は悲鳴を上げる間もなく、そのまま大和と正面衝突した。

かに見えた。

「危ねえ。間一髪だったな」

その声に反応して顔を上げると、そこには自分の知らない男子生徒の顔があった。驚くほど端整で均衡の取れた顔立ちで、慈愛に満ちたような目で愛華の顔を覗き込んでいた。

「まったく大和。普通にドア開ければよかったじゃねえか」

彼の視線を目で追うと、ドアの外で大和と仁が折り重なるようにして倒れ、仁のアーティファクトで二人の体がぐるぐる巻きになっていた。

(え？　なんであたし部屋の中にいるの？)

愛華は困惑の表情を浮かべる。それもそのはず。大和とぶつかりそうになった瞬間に目を閉じて、開いたら部屋の中にいて、しかも見慣れぬ男子が自分を抱きかかえているのだ。

愛華は顔が沸騰したように赤くなり、龍馬の腕の中で気を失った。

1 - 6 ようやく終わる激動の一日

「一体なんだってんだ……」

大和が女子に飛び掛るのを見て、咄嗟に空間転移を使ってその女子を部屋の中に、仁をその女子がいた場所に転移させたまでは良かったが、頭を打ったらしい馬鹿二人はその場で気絶し、腕の中の女子まで顔を真っ赤にして気を失ってしまった。

とりあえず仁と大和を部屋の中に入れ、気を失ってしまった女子は居間に寝かせることにした。

さて、これからどうするか。この馬鹿二人は放っておいてもそのうち目が覚めるだろうが、問題はこの女子だ。この学院に編入するときに渡された生徒手帳（のうちなまもの）には、こう書かれていた。

第六章、寮についての第七条。いかなる理由があっても男子寮に女生徒を、女子寮に男子生徒を泊めることは赦されず。その事実が明らかになった場合、その部屋に住む生徒及び宿泊した生徒には寮からの追い出し、またはそれに準ずる罰則が適用される。随分と厳しい校則だ。不順異性交遊についての事項はないくせに。

ともかく、大和はもともとからこの部屋の住人だし、仁は当然男子だから問題は無いとして、この女子をどうするかを考える必要がある。

（まずはこいつらを起こすか）

俺はそう決心し、まずは仁の元に歩み寄った。仁は気絶したとは思えないほど規則的な寝息を立てていて、それが逆に不自然だった。

よく見ると大和も同じような感じになっている。つまり

(寝たふりか……！)

なるほど。こいつらの意図はなんとなく読めた。だが、そんな下らないことに一々乗ってやるほど俺は甘くはない！……けど、どうするべきか。悔しいけど俺じゃこいつらにはどう足掻いても勝てない。せめてこいつらと同じレベルで魔法が使えるといいんだろうけど……。

そういえば、俺のアーティファクトって何なのかまだ知らないままだな。いい機会だから試してみるか。えっと、始動キーは確か「来たれ」だったな。

「来たれ」

カードを片手にその言葉を口にすると、カードが発光して左手の中に一冊の本が現れた。その側に、カードに描かれていた古い万年筆も現れた。俺はその本の表紙をめくる。すると、そこにはまたもやどこの言葉か分からない文字が書かれていた。

(これが魔法文字ってやつか？ まったく、厄介な文字で書きやがって)

俺は神流で考古学みたいな事もやっていて、古い文字や解読不能な暗号文などを解くことを生業としていた時期もあった。時間をかければ解けないことも無いだろうけど、そこまでするのは面倒くさい。

まあ、今のところは魔法なんて使えなくても法術があるからどうってことはないんだけど。

「普通に起こすか……」

溜息をついて仁の体に手を掛ける。

「仁、起きろ」

ゆさゆさ。やっぱりこの程度じゃ起きない。

今度は大和の方へ。ゆさゆさ。やっぱり起きない。

そう言えば、寝てる奴を確実に起こす方法を昔海斗が教えてくれたな。実践してみるか。

俺は台所にあったボウルを掴み、同じく台所にあったおたまを持って、ボウルを仁の顔にかぶせた。俺が何をしようとしてるか分かった人も多いと思うが、良い子は真似しないように。

俺はボウルに思いっきりおたまを叩きつけた。

ガンツ！ という音がして、仁の体が跳ね上がる。それもそのはず。かぶせたボウルの中で音が反響して、音が脳を揺さぶったからだ。

仁が耳を押さえてそこから中を転げまわる。声にならない「っ！！」という声をあげて悶えている。効果は抜群だ。

「っ、てめっ、龍馬！ 何しやがる！」

「なかなか起きないお前が悪い」

仁の隣では大和がゆっくりと起き上がっていた。流石にあれをやられるのは嫌だったんだろう。やるのは俺だが。

「お前……氷漬けにしてマリアナ海溝に沈めてやろうか……！」

「上等だ……！俺の隠された能力第二弾を使ってお前を潰してやる……！」

こうなったら全面戦争だ。俺の能力を使ってこいつを潰す！

「う、ううん……」

「お、目え覚めたみたいだな」

気絶していた女子を覗き込んでいた大和がそんなことを言った。

「……！」「ガンのくれ合い

「おいお前ら、睨み合ってないでこっち来い」

大和が冷静に俺らを呼ぶ。

「……とりあえず、一時休戦だ……！」

「……後でじっくりと話し合う必要があるな……！」

正直話すことなんて無いがな。

仁とのガンのくれ合いを中断して大和の側による。その側で、さつき気絶した女子がこっちを見ていた。

よく見ると、その女子はかなり可愛い顔をしていた。髪は茶髪で、

どことなくギャルっぽい印象はあるものの、すこしトロンとした目はなんとなく庇護欲をそそる雰囲気があるし、しかし切れ長の瞳はどことなく凜々しい感じもする。頭の後ろで括られたポニーテールからは活発そうな感じもしている。

けどこの女子、どっかで見たことあるような気がするんだよな。それも、今から五、六年以内に必ず会ってる。じゃあどこで？って聞かれると困るんだが。

「あ、あのー！」

その女子の顔をまじまじと見てみると、突然大声を出された。

「何？」

うわ、さっきまで仁とガンのくれ合いしてたから不機嫌そうな声になっちまった。絶対引いてるよ。ミスったなあ……。

「あ……その……えっと……」

さっきまでの威勢はどこへやら、まるで借りてきた猫みたいにしゅんとしてしまった。う……やっぱり俺のせいか。

「あ、あのね、あたしのこと……分かる、かな？」

彼女は俺にそう訪ねてきた。つまり、彼女は俺のことを知っている。しかし俺は彼女のことを知らない。面倒な状況だ。

ここで見栄を張って知ったフリをすると予想だにしない状況に陥ることも無きにしもあらずだから正直に言おう。

「ごめん。誰だったっけ」

冗談とかじゃなく本当に覚えていない。やっぱりどこかで会ったような気もしなくはないが、少なくともここ二、三年以内には会ってない。一度見たら簡単には忘れないし。

「愛華だよ。姫城愛華」

仁が補足する。あいか……愛華……ああ。

「って愛華！？ お前もこの学校だったのか!？」

うつわ懐かしいな。確か仁が転校した次の年に引越したはずだから六年ぶりか。変わるわけだよ。

「で、姫城は何の用で来たんだ？ 理由も無しに来たわけじゃないだろ？」

「あ、そうだった」

大和にそう指摘されると、愛華は側に置いてあったタッパーを取り出し、その蓋を開けた。

「コロッケ作ったんだ。でも作りすぎちゃったから持って来たの」「お、美味そうじゃん」

タッパーの中のコロッケは既に冷めていたが、それでもいい香りは漂ってきた。昔は料理が苦手だったはずだが、さすがに六年も経てば上手くなっているだろう。人と大和が微妙な顔をしているのが

視界の端に映ったが、特に気にしないことにする。

「これ食っていいのか？」

「うん。そのために持って来たんだから」

俺は綺麗に並んでいるコロツケの一つを手で掴み、それを口に放り込んだ。

「うん。結構うまいじゃ」

そこまで言いかけると、突然俺の口がそれ以上の咀嚼を拒否した。

おかしい。口に入れたときには普通のコロツケだったのに、今俺の口の中にある物体は何なんだ？　なんだか妙にニユルニユルネバネバした食感が

「うっ」

マズイ。非常にマズイ。二つの意味でマズイ。俺の口の中で何か化学反応が起こっている。けど、俺はこんな状態になる化学反応には心当たりがない。

辛うじて口の中の物体Xを飲み込むと、今度は喉の奥から猛烈な吐き気と痒みが込み上げてきた。それも、今まで味わったことがないレベルの。

「なあ愛華、これって……」

「あ、分かった？　実はね、ジャガイモと一緒に山芋を練りこんでみたの。ちよっと口の中でニユルニユル」

ニユルネバネバするのが難点だけど、慣れれば美味しいよ」

なるほど。どつりで蕁麻疹が。

「ごめん、愛華。俺、山芋アレルギーなんだ」

「えっ？ そうなの？」

そうなんです。ほら、今も現在進行形で凄まじい吐き気と痒みと蕁麻疹が。

なんとか吐かないようにと頑張っていたが、少しずつ気が遠くなっていつて最後には意識が途切れた。

目が覚めると、すでに部屋は暗く、隣では大和が寝息を立てていた。ケータイを開いて時刻を確認すると、すでに夜中の二時を回っていた。

俺は大和を起こさないようにベランダへの窓（寮の造りは基本的に洋式のため、この部屋みたいにリフォームしても基本的な部分あまり変わらない）を開け、そこから共有スペースであるバルコニーへと移ると、ケータイの電話帳からある番号を呼び出し、国際電話を掛けた。すると、その相手はツーコールで電話に出た。

『Hello?』

「あ、セシリアさん。俺です」

電話に出たのは神宮寺財閥社長の秘書であるセシリア・プライム。あの大会社の秘書である彼女は才色兼備でとても綺麗な人だ。

『……何か用ですか？』

俺です、と言った瞬間に彼女の事務的な声の不機嫌そうな声に変わった。俺は何故か彼女に嫌われているらしい。

「海斗に繋いで欲しいんですけど」

『カイン様は只今商談の最中ですのでお取次ぎすることができません。後日改めてお掛け直してください』

ガチャ、と言う音と共に通話が切られた。相変わらず厄介な人だ。ただ、この時間に商談の最中ということは無いだろう。イギリスとは時差が九時間のはずだから、こっちが真夜中の二時でも向こうは午後の五時のはず。大体の会社は勤務時間が終わってる時間だ。海斗は昼間にしか会議をしないから、こんな時間になってまで会議をしているはずがないのだが。

俺は今掛けた番号とは別の番号を呼び出し、再び国際電話でコールを掛けた。

『はい、こちら王国特務第一部隊隊長、赤月和真』

「和真か？ 龍馬だ」

『おお龍馬。どうした？ 何かあったか？』

この電話に出たのは、神宮寺海斗の友人であり側近の赤月和真。セシリアさんの機嫌が悪いときはこっちに電話した方が手っ取り早い。

若干見慣れない言葉があったかと思うが、海斗が国王に就任した際にそれまでの自衛隊のシステムをすべて廃棄。その代わりとして作ったものがイギリスの王国特務部隊なのだ。

「定期報告。今日の方まだだろ？」

『あれ？ セシリアの方には掛けなかったのか？』

「いつもと同じ。分かるだろ？」

ちなみに、セシリアは自分の上司である海斗にしか心を開いてはいない。

『ああ……アレか……。分かった。そんじゃ俺の方から報告しとくから』

「悪いな」

『気にすんなって。あ、そう言えば唯ちゃんだけどさ』

唯って言うのは、葉盟学院に編入する際にそのまま神流学園においてきた俺の実の妹だ。俺と違って素直で純粋な子だから、逆に変な奴に捕まるんじゃないかという不安から海斗の元に預けてきたんだが。

「唯がどうかしたか？」

『お前に会えないと寂しいつつって泣いちゃってさ、さっき泣き疲れて寝ちゃったとこなんだけど。やっぱお前夜になったら戻ってくる生活しねえ？』

「悪いけど無理だ。空間転移は長距離になればなるほど無駄に法力を使っちゃうからな。今の俺じゃここから神流まで法力七十%は使っちゃうし、そうなると翌日に葉盟まで戻れないからな」

法力って言うのは俺らの能力を使うために必要なエネルギーで、絶大な力を発する代わりにその力が戻るのはかなり遅い。大抵一晩で自分の限界容量の二、三%しか回復せず、もし全ての法力を使い切ったらその力が全快するのに一ヶ月以上かかるのが普通だ。

『でもさ、お前法力も気孔も使えるし天力も使えるだろ？ 海斗の特訓のおかげで』

「あれは特訓なんかじゃない……地獄だ……！」

あれは一昨年のお冬。思い出すのも恐ろしいから割愛。

「分かった。休日ぐらいは帰るからって唯に伝えといて」

『じゃあそう伝えとく。で、報告は？』

「ああ、そうだったな。じゃあ今日の昼からの出来事と考察からな。あれは」

……。

……。

……。

『なるほど、分かった。次の報告は一週間後だから、ちゃんと記録付けといてくれよな』

「了解。あ、そういえば海斗は？」

『部屋で寝てる。最近徹夜続きだったからさすがに疲れたんだろ』

「そっか。じゃあ海斗にもよろしく伝えといてくれ」

定期報告終了。さて、寝るか。

しかし、今日は結構色々なことがあったな。編入先が魔法学校だと知らされて、いきなり学年四位に絡まれて、クラスメイトに学年二位がいて、そいつが俺のルームメイト。久々に再会した幼馴染は学年一位になってるし（背は成長してなかったけど）、もう一人の幼馴染は驚くほど可愛く成長してた。いきなりアレルギーのもの食わされるとは思ってなかったけど。

「明日は何が起こるんだろつな……」

せめてトラブルが無いように。そう願って、俺は床に着いた。

登場人物（前書き）

登場人物を簡単にまとめました。現時点でのメインキャラ5人です。

登場人物

星野 龍馬 ほしの りゅうま 5月17日生まれ AB型

身長192cm、体重92kg

特技

料理などの家事全般、球技、育児（物凄く子供っぽい妹がいるため）

趣味

将棋、チェス、創作料理、筋トレ（暇さえあれば何かしらしている）

好きなもの

食べられるものなら何でも、虫、蜂の子、サソリの素揚げ（一般的にはゲテモノ料理）

嫌いなもの

甘いもの、山芋、里芋、こんにゃく（芋系はほとんど駄目）

備考

中学の三年間と神流学園での一年間で常にトップの成績を取るほどの頭脳を持つ。特に理系が得意で、学校ではいつでも「生徒の模範生」として扱われてきた。

風紀委員に所属していた経験があり、神流学園では血の気が多い人間が多かったため、喧嘩などは手慣れている。

合気柔術の世界では高校生にしてすでに十段を取っている唯一の人間としてかなり有名で、警察関係でも龍馬の名前を知らない人はほとんどいない。

「法術」と呼ばれる能力を持ち、身体能力の面でも常人を遙かに上回る。攻撃能力の高さはもはや異常と言えるレベルで、刀や太刀を使わせたら右に出る者はいない。

葉盟学院では学内に三人しかいない闇属性魔法の使い手で、龍馬は法術と相まって高い能力を手に入れている。

ひめじょう
姫城 愛華 あいか 7月7日生まれ AB型

身長165cm、体重45kg B：84 W：57 H：82（Cカップ）

特技

料理、裁縫、バスケットボール

趣味

絵本の作成、編み物、テディベア作り

好きなもの

みかん、レモンなどの柑橘類、甘いもの、犬や猫

嫌いなもの

じめじめしている場所、蜘蛛、苦いもの

備考

龍馬の小さい頃からの幼馴染で未だにお嫁さんになるのが夢の天然系美少女（イラストが無いのが悔やまれる）。

成績は平均より若干良いほう。運動能力もそこそこ。

魔法の才能は学内でトップレベルで、水属性魔法を使わせたら右に出る者はいない。だが、本人に自覚は一切なし。

法術とは違う能力を持つが、現時点での正体は不明。

竜堂 仁 リョウドウ ニ

2月22日生まれ O型

身長162cm、体重52kg

特技

板金、溶接、金属切断

趣味

氷の彫刻、木彫りの熊作り

好きなもの

辛いもの、冷たいもの、学食のメガ盛り丼

嫌いなもの

自分の身長、古文、世界史

備考

龍馬と愛華の幼馴染。学外にある実家の町工場で中学生のころから板金や溶接などをやってきたため、それらに関してはすでにプロレベル。

理系科目に関しては天才的だが、文系科目は壊滅的。赤点常連。学内最強の魔法使いで、氷属性魔法の使い手。主にツインダガーを使った戦いを得意とする。

身長が小学生でストップしていて、全然伸びる目処が立たないのが目下の悩み。それゆえ、身長に関して大きなコンプレックスを持っている。

神羅木 かみらぎ 大和 やまと 1月6日生まれ B型
身長185cm、体重72?

特技

演舞、茶道、華道

趣味

落語、舞台、和菓子作り

好きなもの

和食、さっぱりしたもの、スイカ

嫌いなもの

中華、脂っこいもの、パイナップル

備考

仁の親友で龍馬のルームメイト。落ち着いた物腰とクールな印象が相まって学内での人気は高い。

茶道の家元、神羅木流当主である神羅木久枝ひさえの一人息子で、高校卒業後は実家を継ぐことが確定している。

学校でもどこでも基本呉服に身を包み、扇子を持って歩いているところを多くみられる。

文系に関しては天才的だが、理系科目は壊滅的。

龍馬と同じようにとある”法術”を持つが、現時点ではその能力は不明。

鬼灯ほおずき 灯あかり 6月25日生まれ A型
身長159cm、体重44kg B:79 W55 H81 (B力
ツプ)

特技

細かい作業、書類のまとめ作業

趣味

料理、お菓子作り

好きなもの

爬虫類、魚

嫌いなもの

努力をしないで強くなろうとする人、パソコン（機械が得意じゃない）

備考

龍馬と大和のクラスの委員長で愛華のルームメイト。

元気で明るい活発な少女でクラスのムードメイカー。

愛華とは違うタイプの美少女で、校内に思いを寄せている男子は多い（女子も多い）。

成績は平凡。運動能力が若干高め。

今は見る影もないが、はるか昔に栄えた「篝火かがりびの一族」の末裔で超強大な能力を持っている。

だが、普段はその力を封印している。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2266u/>

Cross x world ~ 交錯する世界 ~

2011年7月2日21時43分発行